

まだ見ぬ未来へ

打 樋 啓 史

本学に勤めて、早いもので18年目になります。私は中学部から関西学院でお世話になり、大学では二つの学部で学び、大学院の後期まで進んだので、計17年間、関西学院で生徒・学生生活を送りました。教員としての年数を合わせると、これまでの人生の7割以上を関西学院で過ごしてきたことになります。改めて数えてみると、こんな私を今まで見捨てずに育ててくれた「関学」が、人格をもった優しい親のように感じられてきます。

関西学院での35年を振り返ると、やはり「いい日々だった」と思います。失敗や苦い経験も少なくありません。しかしそんな時にも、周りの人々に支えられ、子どもの頃から大好きだったこのキャンパスの自然に囲まれて、歩んでくることができました。先の不安はありますが、過去の日々を思えば、「これからも色々あるだろうけど、根本的なところでは大丈夫だろう」と安心できるのです。

旧約聖書では、通常とは逆に時間をとらえます。私たちは、現在から見て、過去は自分の後ろ、未来は前にあるものと考え、「未来に向けて前進する」と言います。これに対し旧約聖書では、過去は「前にある日々」、未来は「背後にあるもの」です。これは、過去とは「神が既に行われた救いのできごと」として目の前に見えているもの、未来とは「神の手中にあってまだ見えず、背後に隠されたもの」と考えられたことによります。過去の救いのできごとを見つめて、「同じ神がこれから先もすべて整えてくださる」と信じることで、人々はまだ見ぬ未来へと進む勇気を得たのでした。

これに従えば、人は時間の流れのなかで、言わば「後ろ向きに進む」ことになります。ちょうどボートを漕ぐようなものです。ボートを漕ぐとき、進む方向、すなわち未来は、漕ぎ手の後ろにあります。漕ぎ手にとって、自分が通ってきたところは目の前にありますが、進んでいく方は後ろにあって見えません。漕ぎ手は目の前のものをしっかり見ていないと、ボートを後方に正しく漕ぎ進められないのです。

大学では秋学期が始まりました。私たちにとっての「前にある日々」、つまり過去を思い起こすことから、まだ見ぬ未来へ歩を進めたいと思います。思い出したくない過去の痛みや傷もあります。でも同時に、自分がこれまで生かされ、愛され、守られてきたという事実を見つめるとき、「これからもきっと大丈夫」と、不思議な勇気が湧いてくるのです。

(社会学部宗教主事)